

## ジークフリート・カヴェラウの「徹底的学校改革者同盟」論（Ⅱ）

船尾 日出志 訳

社会科教育講座（哲学）

### Siegfried Kawerau's Der Bund entschiedener Schulreformer (II)

Hideshi FUNAO

Department of Social Studies, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

#### 訳者から

ここではドイツ・ワイマル期の1919年の徹底的学校改革者同盟創設以来の幹部であり、同盟の代表的人物であったパウル・エストライヒの盟友、ジークフリート・カヴェラウが1922年に刊行した冊子『徹底的学校改革者同盟 成立と本質』【Siegfried Kawerau: Der Bund entschiedener Schulreformer. Werden und Wesen. Oldenburg und Co. Verlag, Berlin 1922】を訳出する。

同冊子はパウル・エストライヒによって編集され、徹底的学校改革者同盟に委託を受けたドイツ教育の改革のための『徹底的学校改革』叢書の第1号として刊行された。エストライヒが執筆者として同盟のなかで社会科＝歴史教育を専門としていたカヴェラウを選んだのは当然のことと言えよう。

冊子の構成は次のようになっている。当然、2～7の著者はカヴェラウである。

1. パウル・エストライヒによる添え書き
2. 時代
3. 徹底的学校改革者同盟の端緒（労働学校思想）  
（以上は平成24年度の研究報告【愛知教育大学研究報告. 教育科学編62, 183-190, 2013-03-01】に掲載）
4. 闘争と成熟（体験学校思想）
5. 新しい精神の出現（生産学校思想）  
（今回は上記4と5）
6. 蓄積と創造（嵐の前）
7. 時代の渦の中で（現代）

比較的小さな冊子とはいえ、原文で60頁のボリュームのものであり、与えられた紙幅の関係で3報に分けて発表していく予定である。可能なら第3報に解題を載せる。

なお本文中の《 》内は訳者による補足であり、ゴシックによる強調箇所は原文ではイタリック部分である。

#### 闘争と成熟（体験学校思想）

1920年1月に、共和国内務省教育担当次官ハイナリッヒ・シュルツは同盟に要求した。指導原理とレポートを、新たに予定されてはその都度、繰り返し延期されている全国学校会議のために提出するように。突然、短期間の間に提出することが求められたので、エストライヒは、自分自身が代表せねばならないであろうことを認識していた。同盟のレポーターは新しい学校の本質を「体験学校」と定式化し<sup>1)</sup>そして妥当な批判にさらされた。というのは、純粋に主観的契機が客観的定式化に変わることはありえないからである。ここでは、不適切な仕方で覆い隠された際限なき個人主義が出現している。というのは、「新しい人間」のために次のように定式化することは余りにも安易であるからである。すなわち「その行為は確信と誠実に起因し、そしてしたがって常に共同体における貢献である」と。そのことは、味も素っ気もない言葉を用いれば、共同体のあり方と課題を個人から規定し、自分自身を他者の尺度とすることを意味する。そのことが共同体に適合しないとき、共同体は決して共同体ではない。というのは、わたしは確信と誠実にもとづいて振る舞い、そしてそれによって共同体における貢献を行うからである。エストライヒもまた体験学校の定式化に幻惑されていた。『社会教育学雑誌』においても、『行為』誌の1920年第4号（主題は「実験＝統一学校の概略」）においても、その様子がみえた。全国学校会議において、その定式化にたいして専門的かつ感情移入の精神によって担われた批判をおこなったのはゴールドバックであった<sup>2)</sup>。かれは体験学校という言葉による解明におおいに感謝したが、しかしあらゆる体験的方法に拒絶的であった。そして正当にもかれ

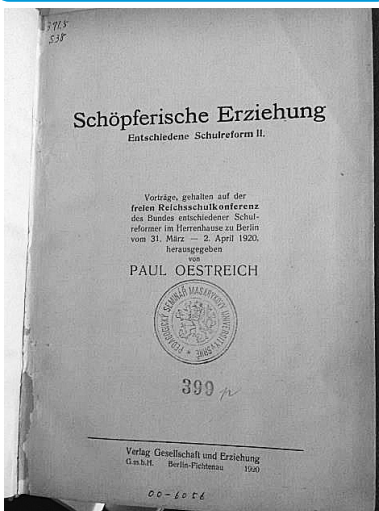
は、そのような仕方が「あまりにも芸術家の意志に照準をおいた」ものであることを指摘した。そして、事実、徹底的学校改革者同盟の基本要求は1920年の前半には完全に芸術家気質、創造的なものの理念のもとにあったのである。

『創造的教育』は1920年の復活祭会議の記録文書<sup>3)</sup>、すなわち1920年3月31日から4月2日まで、再びベルリンの以前の貴族院で開催されたあの「自由全国学校会議」の記録文書である。それは間近の公的な全国学校会議に必要な精神的圧力を行使すべきであった。すでもっとも控えめな進歩派でさえも、渦巻く反動的策謀の泥沼のなかで窒息しそうであったから。

1919年の労働学校思想は1920年の創造性原理の宣言によって確かに実り豊かでそして本質的な解明をされた。その結果、労働学校思想は無味乾燥な手先の器用さを訓練するメカニズムから解放されたが、しかし主観的な享樂の、つまり最高に個人的な気分と恣意の表現になってしまうという危機に陥った。

そしてここで内的に新しく、的はずれであるゆえに、危険を伴う道が歩まれたのと同様に、外的には不明瞭さもまた支配的となった。徹底的学校改革者同盟は大学卒の教師たちの同一方向を向く一つの組織として成立していたが、正規でないメンバーとして素人たちもまた受け入れた。さらに同盟は青年組織に命を吹き込むために、新たに大学生の同盟を前進させることを希望した。分裂しそうであったし、人材も不足していた。

#### 復活祭会議の成果のまとめ『創造的教育』



市庁舎内にあったエストライヒの市会議員室で、蠟燭の光のもとで会議したことを決して忘れることはなかった。それぞれがゼネラルストライキ中の激高するベルリンを通して、かなりの距離になる道りをやってきたことも忘れることはなかった。そしてカップ「閣下」に支配された文部省のもとであっても、貴族院で示威行動をすることを固く決意したことも。しかし、そのような示威行為は起こらなかった。会議が始まったと

き、カップはすでにやっつけられていた。しかしヘーニツシュは職に留まっていた。ヘーニツシュの政策にたいして最も強い抵抗を示していた党派《独立社会民主党》も、しかし最終的に2票差でかれを支えた。一時的には、文部省の可能性がエストライヒの念頭に浮かんだ。しかし最終的には、その党は自分自身のエネルギー不足に不安を持った。それゆえヘーニツシュが留まり、そして一度は貴族院に来なかった。火傷した子どもは炎を嫌う。

復活祭会議はしばしば批判を受けたが、肯定されるべき点では、強力な生命力を示した。視線は国際的に拡大され、すべての国の教育問題が共通の危機にあるとみられた。相応に、エストライヒは未来学校を「人間陶冶」の学校であると称し、新しい教育の実践を獲得するために、実験学校を要求した。全体として、かれもまた相当に個人化させる《個人主義》傾向のもとにあった。かれが「体験共同体」について語ったことにおいても、かれが孤立した実験学校について約束したことにおいても。

エストライヒの場合、そのような強い個人化への喜びは高度な社会的責任感によって制御されていた。しかしそれは（個人化への喜び）専ら知性偏重者たちのなかに、追体験者たちおよび実感を重要視する者たちのなかに、場合によっては破壊的に浸透していた。かれらを命取りとなるような路線へとせき立てながら。

復活祭会議における国際的な感覚はモンテッソーリ風システムの尊重においてもまた反映されている（そしてドイツにおける最初のモンテッソーリ風システムを取り入れた施設をベルリン郊外のランクヴィッツに設置したのは、学校改革者、オストロフスキーである）。

生徒選抜の問題は当時、さしあたりまだ次の二者択一のなかで関心を集めている。すなわち他者による選抜か、自己選抜か。その後、全国学校会議では第11委員会「生徒問題」において、徹底的学校改革者同盟の代表が、理解力があり、人格者でもある教育者の指導のもとでの生徒自己選抜に賛成するハンブルクのカール・ゲッツと肩を並べて、ヴィルヘルム・シュテルンの方針に反対する風を巻き起こした<sup>4)</sup>。

1920年の貴族院での会議におけるその他の諸問題の取り扱いのなかで、青年運動の社会学的分析は次の2つの兆候であると評価されている。すなわち第1に学校改革運動が青年運動における最良のものの意味豊かな継承であるという一般的意識（の兆候）、そして第2に精神的問題を社会的問題の関連から総じて把握するという科学的立場（の兆候）。青年運動が社会的・経済的発展の客観的現象として追究されることによって、視野が広がり、批判的方法が鋭くなる。

最後に、芸術教育が特別な役割を果たしている。そして全体的立場に相応に、会議は青年たちによる支援

をえた青年祭で終了する。アベレ・シュライバーは冷静に人間性の根源を追究し、ヴェークシャイバー・ツィークラー夫人は温かい言葉とともに、犠牲を通して、共同体に至る道について語り、ジークフリート・カヴェラウは若者の苦悩の道を描写し、そして孤独と深い視点のなかでの克服を示している。そこでは、カヴェラウは普通の家族のエゴイズムにたいして鋭い批判をおこない、そしてそのようにして—まさにその演説にたいして与えられたあらゆる歪曲にもかかわらず、あらゆる中傷とあらゆる憎悪にもかかわらず—古い社会の枠内での家族問題のより深い認識のための基礎を生み出している。

復活祭会議の直後に、同盟の幹部のなかで久しく存在した潜在的な批判が激しくなった。全国学校会議における同盟の代表者は、同盟の議長あるいは幹部にそのことについて知らせることなしに（議長あるいは幹部はその事実をようやく新聞から知った）、リヒターフェルトにおける以前の陸軍幼年学校の指導を承認した。軍国主義に完全に汚染された教育の営みのまっただ中で、実り豊かな活動の可能性のための確かな保証をもらうことなしに。その新しい高等学校長殿は同盟にたいして（そのようなもめ事は、もっともなことだが、同盟のせいにはされた）、その私的な営みは同盟とまったく関係していないという公的声明を拒んだ<sup>5)</sup>。

かくして幹部たちは、1920年7月13日にかれらの側で公的に事態の正常化を強いられていると考えた<sup>6)</sup>。リヒターフェルトの校長の側に立ったのは、本当に小さな、しかし口達者なグループであり、苦痛を伴う痙攣の後、最終的に明確な分裂が起こった。

同盟中央におけるそのような内的葛藤とならんで、個々の同盟員の多様な外的葛藤がかれらの学校において進行した。両親評議会選挙は、当時までただ陰で不平を言うだけであった陶冶下層民《Bildungspöbel: 差別的》の本能を目覚めさせた。そしてその闘争は、それを旧秩序の受益者たちが事実的に導くことができたわけではなかったが、人身攻撃的かつ悪意に満ちた仕方、あらゆる偽善的かつ陰險なデマゴギーの規則にしたがって指導された。エストライヒはある公的な両親集会において、自分の同僚である教師たちによって「ドイツランド、ドイツランド、ユーバーアレス」と—それを「教育的」協力者である生徒たちが囃し立てた—大声で罵倒された。カヴェラウは、ビスマルク公爵学校の不器用な同僚の紛争に巻きこまれた。そしてそれが災難であったという記事を「新教育」誌の諸報告のなかに加え、そしてかくして責任ある編集者として訴訟に巻き込まれた。その訴訟は2人の学校改革者の不利な仕方での和解で終わった。学校長にたいする非難はその曖昧な定式化のために正当と認められず、そして退けられねばならなかった。別の側面では、その訴訟は次のような良い成果をもたらした。すなわちカヴェ

ラウにたいする憎悪は、その学校での女生徒たちへの道徳的に問題がなくはない教育ゆえにそれ自体で挫折し、そして以前の生徒である主要証人の「わたしたちにとって、アインキュッペンハウス《Einküchenhaus》は自由恋愛に満ちあふれていた」という告白のなかで恥知らずなものであることが明らかになった。個々の一匹狼的な人々は同盟から出て行った。というのは、同盟は個々の個人の戦い《Bekämpfung》とは異なる別の課題を知っていたからであった（個々の個人はおそらく、まだひとつの戦いに相当、価値をおこうとしていた）。そのことはさまざまな個別の「場合」についてのあの経験すべての苦い教訓であった。あれこれの反動派にたいするあらゆる闘争は旧権力の網のなかに捕らえられ、無限の時間を、力を、そして—わけでも大切なことには—お金を浪費し、そして決して満足でき、明確な成果へと導かない。旧官僚制（司法、行政）は互いにもつれあっており、あらゆる個々の衝撃は消えてしまい、その場合、根本的な新秩序のみが変化をもたらすことができる。ますますより以上に、全体が重要となっている。

第3の大きな闘争として、そのあらゆる種類の危機の時代に、1920年6月11日から19日までの全国学校会議における論争があった。エストライヒは総会での旧権力にたいする大いなる批判について、そして学校建設分科会におけるかれの特別な批判について、同盟の報告のなかで（1920年7月）自身、伝えた。さらに公式の議事録を改めて参照するよう指示されねばならない。エストライヒは学校政策上の左派であると認められた指導者であった。

そしてそこで次のようなことが起こった。エストライヒは討論のまっただ中で、そのときかれは病気のせいで欠席した補足報告者のかわりに結語を語っていたのだが、切り込みを実行した。その切り込みは同盟を、同盟とその代表者たちにはすでに命取りとなるように思われていた見解から分離した。かれは説明した<sup>7)</sup>。「わたしもまた、体験が方法として系統化されているとは信じない。わたしはさらに、『体験学校』、『体験方法』という言葉がおそらく完全には正当ではないと信じる。わたしはそのかわりに『生活学校』という言葉を採用するだろう。ゴールドベック氏はまた、大部分の人々がおそらく、そのような体験にたいする能力がないこと、そして絶え間なく連続する『体験』の連鎖は性格の墮落へと導きうると述べた。そのすべてに、わたしは大賛成である。しかしわたしは次のように信じている。すなわち、わたしたちが願っている生活学校では、つまり生活にそのすべての方向から流れ込み、そして生活をすべての側面から自己に引き入れる学校では、硬直した制度化なしに、普通の知性の持ち主たちのための、すなわちいくつかの小さな素質で満足しなければならぬ多くの人々のための場所もまたある

ということ、さらにそこには厳しい、ある確かな度合いまで規律化された活動のための場所もまたあるということ」。

その拒絶とその認識によって、さらに実り豊かな活動のための道筋が獲得され、かくして力を得たエストライヒはその後その分科会のなかで古い精神の擁護者たちとのかれの闘争を実行することができた。すでにかれは新興団地の問題について、そこに潜む国民経済学的諸問題を指摘している。

第2の分科会では学校建設をめぐる論争が始まる。今やすでに次のように述べられている。「学校は生活に満ちた経済の営みの場でなければならない」<sup>8)</sup>そして最終宣言のなかで将来のキーワードが含まれている。「わたしたちは労働学校と生活学校を、つまり青少年の生活としての、同時に生産学校としての学校を要求する」<sup>9)</sup>。

かくして道筋は自由主義的「労働」学校から「体験」学校を経て「生産」学校に到達している。そして次のことは「公認」SPD文化政策の代表者にとって特徴的である。すなわちその政策の重要な擁護者、つまり以前の高等学校教師が生産学校を「その古い、しかし真に社会主義的である労働学校の要求を保持する社会民主党を現代的でないとさせるために、共産党の側から密かに持ち込まれた曲解の流行語」であるとあえて嘲笑することは。SPDは同盟の第1回大会ではまだ共感的な立場をとり、そして党の文部大臣を派遣していたが、その後一時は、同盟の諸志向にたいしてほとんど敵対的な態度をとった。そして同盟のさらなる発展を共にすることができなかつた同盟員たち、かれらは同盟から離れ、そしてしばしば不毛な陰謀のなかで、求職策謀《Stellenpolitik》のなかで、そして自分が役立つことを追加的に証明しようとする試みのなかで消耗した。

そうこうするうちに、まさにSPDの分別あるグループの人々のなかでもまた、誰の手に党の文化政策を委ねるかという認識が少し明らかになる。

同盟はその間に一同盟の活動にとって死活に関わることだが一機関誌を創出した。同盟はその機関誌を宣伝と自己の究明のために必要とした。

まず1920年1月以来、単純な情報伝達誌が刊行された。それは月刊であったが、そのうち5つが手元にある。そこではもちろん論説は発表されなかつた。同盟員たちに、あちこちの重要な協力者たちによって新聞および専門雑誌のなかで発表された刊行物を読むように指示された。

カヴェラウはその情報伝達誌を編纂し、ユリウス・ベルツ社が出版を引き受けた。とりわけ組織的諸問題を対象とするか、あるいは教会の干渉への防衛に貢献した若干の陳情書が印刷され、さらに役所からのその陳情書への回答が印刷された。

同盟は大いに拡大し始める。至る所で分散していた個々のメンバーの統合によって、かれらはベルリンにならって連絡をとりあっていたのだが、地方における新しいセンターが形成された。すなわちザクセン、フランクフルト(マイン河畔)、シュテッティン、ハノーバーで。しかしバイエルンへの希望は実現されない。ハンブルクはまさに同盟への共感に満ちている。とはいうものの(ハンブルクは)一般的発展の多くの事柄において先行しているので、そこでは共通の困難への関心が欠落している。

1920年の4月号では(同盟の)綱領の変更がごく簡潔に告げられている。すなわち、社会的責任感情が高まり、個人の利害と共同体の利害の何らかの仕方での均衡が欲せられるだけでなく、その課題への意識的立場が欲せられる。もはや諸学校の弾力的な上級段階による知的才能の持ち主の選抜は欲せられず、内的に完全に弾力化され、個別化された統一学校が欲せられ、それゆえ弾力性の概念は教育の過程全般に拡張される。

1920年4月に同盟は「新教育」誌にたいしてしっかりとした立場を獲得する。ベーゲ(Baegel)博士とならんで、カヴェラウ博士が同権で編集部に入る。同盟の情報は半ボーゲン《8頁》の厚さで「新教育」誌の毎回の付録とされる。「新教育」誌への同盟の影響が知覚可能となるには、もちろんまず最初に山のような草稿が精査されかつ整理されねばならない。(同年)7月以来、その雑誌は内的にもまた同盟の機関誌であるとみなされる。しかしなぜか、同盟員にのみ発言させるという姿勢を確認することはなかつた。

パウエル・エストライヒの巻頭論文は同盟の闘争にとって典型的である。すなわち「苦境と支援」という題名の論説である。苦境：反動派の高まる圧迫、カップ一揆の前触れ、しかしまた左翼からの不可解な攻撃。というのは、同盟は超党派的に維持されていたからであり、というのは、同盟はある政治綱領を無条件に信頼せず、かえってすべての陣営から、教育革命にたいして良き意志をもつ人々が集まっているからである。支援：超党派的な団結した文化活動。そのために同盟の諸規約は最低限綱領を形成している。

それに応じて1920年4月16日頃、「新教育」誌のもう一人のヘッドが登場する。すなわち初めてベーゲとカヴェラウが責任者として署名する。「新教育」誌は今や「徹底的学校改革と自由学校政策のための雑誌、同時に徹底的学校改革者全国同盟機関誌」と名付けられる。その名称の意義は、もちろん同盟の全活動を入念に考察すると分かることである。1920年5月には、「体験」圏から当時、素朴な、しかしかなり際限ないと言えるような批判が1919年の10月大会の諸講話に向けて起こった。その間にエーリッヒ・ライツ《Erich Reitz》は次のように述べた。「そこから教育がその陶冶的力を創造すべき体験は、一定の生活年齢としての若者

の欲求のなかに、そして成長途上の個々の人物の諸要求のなかに求められる。新しい学校は、直接的に社会の一定の要求に貢献するのでなく、人間社会の理想的形態を模造し、そして成長途上にある世代のために素養を身につけさせるそれ自体において静止している有機体である<sup>10)</sup>。

そのように同盟の活動が理解されていた。まさにユートピア的＝形式的要素が実り豊かな土壌に落ち、そして成熟し、その結果、個人主義的に育成された世界知らずが、そして初期の同盟活動における対話の少なさが、自ら「現実的」政治家であると示唆する人々の本質的原理となる。そう、現実的政治家が「今日」の政治家、すなわち一日でしばしば500ポイントほど変動する為替的政治家であるならば、それらの紳士たちは「現実的」政治家である。かれらに、わたしたちはその評価《“「現実的」政治家”という》を喜んで、そして妬みなしに譲り渡す。—

しかし同盟は別の道を歩んだ。エストライヒが全国学校会議において同盟の目標のためのスローガン：生産学校！を認識したように、かれは唯一その本質に合う同盟の形態を発見した。1920年7月16日に、かれは巻頭論文「ひとつの国民、ひとつの学校、ひとつの同盟」によって、爾来同盟の意欲と奮闘の証言をおこなう『新教育』誌の一連の号を開始させる。

もはや大学卒業者の同盟でなく、学校に特化した諸同盟の集まりでなく、一般的国民同盟である。そこでは大学出身の教師も師範学校出身の教師も、そこでは大学教員も青年たちも、そこではあらゆる領域とあらゆる身分の男も女も同じ権利と義務で共同活動する！そしてひとつの同盟の内部にさまざまな問題を研究する活動的集団が。

それによって組織の将来の発展方向もまた示された。

それらの認識は相当に将来を楽しみにさせ、しかし外的困窮は酷くなっている。すでに外的に、『新教育』誌の装丁はますますより粗末になり、それは量的にも減り、かろうじて月刊で発行され、より安価な（そしてかなり出来上がりの悪い）印刷業者が求められている。そして同盟の活動のための資金調達はますます困難になる。誤った新聞の小記事によって、同盟には数百万も寄附されているかのような評判を受けることとなった。しかし残念ながら今日に至るまでそれはない。しかしある期間、学究的生産共同体についてのプランが論議されていた<sup>11)</sup>。その論議について、なお将来を信じて、独立の情報伝達誌（1920年5月）の最後の、そして5番目の1冊が『ランクヴィッツの生産学校』という先の見込みのあるタイトルのもとで報告している。そして冊子の著者の1人であるフランツ・ミュラー《Franz Müller》は、感情的に、しかし気前よく、その学校の自立的経済条件の概観を与えている。この

プランでは大学生のみが考えられており、ミュラー論文は、それは運命的に同盟の活動の転換点（失敗した、まったく実現しなかった実践的個別実験についての幻滅）に位置しているのであるが、生産原理（ただし成長途上の若者との活動の個別の場合にとっての）の把握において認識的に将来をはらんでおり、同盟の活動の第1章の終結であるとみなされる。より包括的に思考することが重要であり、生産原理は新しい社会の学校の主導思想として原理的に把握されねばならない。

## 新しい精神の出現（生産学校思想）

『新教育』誌の8月号<sup>12)</sup>は初めていくらか統一的テーマのもとで叙述している。それは古い教育の権力である罰と宗教との絶縁である。その2つの思想とも同盟の活動にとって意義をもつようになる。学校罰の問題には常に留意され、その問題を集めたのは1922年の4月号である。そこでは同盟幹部もまた、多くの同盟員の提案からまとめられた役所あての陳情書のなかで対応している。そしてついにその問題に、1冊の特別な出版物が捧げられている。それをパウル・エストライヒが1922年6月に『罰の機関か、生活学校か』<sup>13)</sup>というタイトルで編纂した。「子どもおよび成人にたいする罰と脅し」というテーマについての1920年8月のフランツ・シャハト《Franz Schacht》のかなりオリジナルな論述はすでに相当に社会学的な特徴を示している。完全に社会学的な意味において定位されているのは、カヴェラウの包括的な研究「宗教教育と道德教育」である。カヴェラウが「国家と教会の分離について」の研究<sup>14)</sup>のなかで始めたこと、それをかれはここで《＝「宗教教育と道德教育」》継承している。すなわち、宗教と国家、教会と国家の問題の解明、その権力を維持する古い社会の武器としての宗教教育、道德教育の分析。社会主義があたかもキリスト教の実現であるかのような、当時、宗教社会主義者同盟によって労働者階層のなかにもまた持ち込まれた大きな混乱は、命令口調で諸概念の純化を要求している。かくして、ここで鋭い対照が生じている。「キリスト教はあらゆる苦境からの救済を他者の力の遂行によってもたらそうとする。すなわち他者のために処刑された救世主によって、慈悲から救済を与える神（神は祈願によって影響される）によって。それにたいして社会主義はあらゆる苦境からの救済を兄弟姉妹たちとの共同のなかで自己の力によってもたらそうとする。すなわちあらゆる生活者の連帯的に結合されそして秩序づけられた力によって、正義（正義は祈願を必要としない）によって。社会主義国家における学校はキリスト教的宗教のための場所を持つことができるのであろうか。

その場合、キリスト教と宗教の間、キリスト教と宗教と社会主義の間が明確に区別される。その後、そ

の思想の継承において、1920年末に書かれた『社会学的教育学』<sup>15)</sup>のなかで次のように言われている。「社会主義とキリスト教は対立する。社会主義と宗教は決して対立しない。しかしそれらの概念は重なることもない。アイデア論的に《理想論的に》表現すると：社会主義は有限なものへの、肉への、人類への、労働とその所産への、自然への、簡潔に言うならば、わたしたちの感覚、わたしたちの思考が把握するものへの畏怖（現代の人類との深い統一意識のなかで体験された）である。宗教は無限なものへの、わたしたちの把握力を越えるものへの畏怖（あらゆる時代の人類との深い統一意識のなかで体験された）である。—

宗教と社会主義は同心円であり、その中心にわたしたちの意識が位置する。小さい方の円、つまり社会主義の周はわたしたちの地平と一致し、大きい方の円、つまり宗教の周は無限なもの、宇宙的なものの中にあり。」<sup>16)</sup>

たとえそれらの論述が何か決定的あるいは綱領的意義を同盟（同盟そのものはそれらの問題にたいして間接的にしか発言していない）にとって要求しえないとしても、しかし未来の学校、すなわち生産学校（組織的な宗教教育も、そして同じく系統的な道德教育も行われぬ）にとっての根本的立場が明らかとなる。宗教（畏怖と友愛性であると把握された宗教）は生産学校の背景である。そのほかに宗教生活の歴史的発言において一般的意義を有しているもの、それは社会学的に拡張された歴史教育に属している。とはいえ、ある平日を自由にさせる生産学校は宗派的種類の私的願望にもまたチャンスを与えることができる。両親に、その日をそのような仕方で使用することを委ねることによって。

生産学校の枠内で、偉大な活動の完了に際して、つまり兄弟と姉妹との、太陽と地球との、宇宙のあらゆる神秘的な力との共同性の体験に際して、あらゆる時代と民族からの深い宗教生活のさまざまな例証への思慮とともに始まる祝典の時への欲求が高まるとき、事情は違っている。

道德教育にあっても事情は似ている。革命後、国家と教会、学校と教会の純粋な分離がなされ、そして宗教教育が教育課程から消えるだろうというところまで一般的期待が進んだ。その際、人民の代議士のみならず、世間全体がそのつもりになっていた。そして世俗的処方箋に則った道德教育についての諸問題が登場し、そして不可思議なプランでさまざまな人の頭脳を満たしてしまった。第1回学校改革会議ではそのことについて「授業における倫理的諸課題」というスローガンのもとで語られ<sup>17)</sup>、第2回会議では報告「青年運動」<sup>18)</sup>と報告「倫理的学校教育」のなかで語られ、続いて1920年8月には次のように定式化された。「しかしわたしたちが人生を闘っているとき、宗教教育か道德

教育か、という疑問が、きわめて奇妙なことに、わたしたちのなかに起こっている。あたかも恋人たちに、さてそもそも愛とは何かについて教えを与えることを提案するかのようである。かくして宗教教育と道德教育は、宗教と道德が生活のなかで失われていることのかなり確かな兆候である」<sup>19)</sup>。

その対応と、高揚する生活との関連のなかで、生産学校のなかで繰り返し道德的経験を高めよという要求（一部は共同体の枠内で、一部は個人的話し合いのなかで）が一致するだけでなく、むしろ必然的に結合している<sup>20)</sup>。世俗学校についての勧告的意見のなかで、エストライヒは1920年の雑誌『情報』の9月号で次の結論に達している。授業のない平日のために選択制の宗教科教授と宗派的教授を好みにしたがって許すという。一方、「世俗」学校は他の5日間においてそのオプションはないままである。かれはそのことをドイツ国民の目下の分裂への容認（ドイツ人がある日ひとつの国民となり、そしてその私的な片隅のようなものをもはや必要としなくなるまで）であると考えようとしている。

しかしその状況にとって特徴的であるのは、唯一、中央党《カトリック教徒を支持基盤とする保守的政党》が学校改革運動の意義を把握していたということである。自由主義的報道界がたいてい表面的に批判し、そしてときおりまさに嘲笑している一方で、中央党陣営のなかには明確な危険の認識がみいだされる。ウルトラモンタン派《バチカンに忠実なカトリック保守派》の地位を脅かすのは、社会民主党の算数学校（わずかな「宗教の時間」しかない「普通の学習学校」）でなく、福音派の民衆学校でもなかった。カトリック派でこそ重大な力が高まっていた。全国学校会議で、それどころか学校構造のための委員会においては、エストライヒの学校プランがほぼ聖ウルスラ会の修道女《1535年イタリアで創設された女子修道会》たちの支援をえて多数の支持をえるという奇妙な瞬間が存在した。まさにエストライヒに、カトリックの側でかれ自身の思想の実践的に試すことができるということが示唆された。その傾向がカトリックの側の中心に植えつけられるならば、教会にとってどれほど充実であるのかを説明すれば、世間をよく知る中央党は、何が肝心であるのかを、すなわち人間的諸力の途方もない覚醒が肝心であることを、そしてそのことは幸運であることを容易に把握する。繰り返しウルトラモンタン派の側では生産学校の思想と根本的に取り組み、そして教会が、それがなんとか消化できる限りで、その生産学校の思想を受け入れるだろうということはほとんど疑いない。もちろん「より固く」結合する純粋な金属の「合金」のもとであるのならば。

1920年の秋の大会に先だって、『新教育』誌の2番目の重要な号（1920年9月16日付）が出る。それは「労

働」,「手労働」,「現在と将来における芸術教育の思想」が特集されている。ここでは『新教育』誌において初めてフランツ・ヒルカー (Franz Hilker) が、かれが考えた「芸術的体験のための学校と教育」という中心テーマについて論述している。その際もまた体験学校の誤った思想に言及され、さらに体験について可能性と内容と種類にかかわって厳密に把握されている。その本質は活動である。そしてここですでに、間もなく刊行される著書『若者の祝祭』への指摘がある。それはシリーズ「生活学校」(そうこうするうちに11号まで増えたシリーズ)の第1号である<sup>21)</sup>。

『新教育』1920年の9月号の「音楽展望」欄のなかで、ヒルマー・ヘックナー (Hilmar Heckner) は音楽と芸術ダンスの間の諸関係に洗練された表現を与えている。かれはそれにより、学校改革にとって非常に重要であるリズム体操に門戸を開いている。

それらの重要問題との関連で、社会民主党の機関紙『前進』における徹底的学校改革者同盟の秋の大会を歓迎する論説のなかで、カヴェラウはその教育綱領の生成について探究し、そしてその鍵をカール・マルクスにおいてみだしている。すなわち『資本論』から次の文章が引用されている。「工場システムに、未来の教育の芽が由来している。未来の教育はある一定の年齢を越えるすべての子どもたちのために生産労働を教授や体育と結合するであろう。社会的生産を高めるための方法としてではなく、さまざまな面でフルに発達した人間の生産のための唯一の手段として」。

そしてマルクスが問題を非常に簡潔かつ明瞭に定式化しているゆえに、いくつかの短いテーゼのなかで1920年の秋の大会における協議内容を再現する冊子『生産学校のために』<sup>22)</sup>もまた、カール・マルクスの上述の言葉で始まっている。パウル・エストライヒはマルクスの定式化を自分の言葉に翻訳する。「生活に無縁な幻の世界から、資本主義的寄生の贅沢製品から、自然融合性、生活融合性および世界融合性への帰還、教え込みのための経済にもとづく伝統的な歪んだ陶冶から、生産に参加させる教育への帰還。わたしたち『徹底的学校改革者』は、状況の論理に適うために、言語学者反対派の狭さから、経済に基盤をおく文化改革の広さに前進しなければならない」。

ランクヴィッツのフェスティバルホールにおけるその秋の大会で、生産学校の問題が検討され、何よりも実践的諸問題が前面にきて、開拓農地との、土地の耕地化との諸関連が権威者たちの側から明確に提出された。また「教育学的」生産という言葉がすでに資本主義的(生産)という言葉にとってかわった。未来においては、学校にとってのみならず、社会全体にとって有効であるべき言葉であった。

しかし手工業や機械の運転の問題はまだ十分には考慮されなかった。生産学校がより素朴な経済形態への

後退を意味しないためにも。どのような度合いで経済的考慮が決定的で、どのような度合いで若者の流儀が決定的であるのかという問題も考慮されないままであった。家庭生活との関連、女性が才能を伸ばす固有の仕方—それは大問題であり、なお至る所で繰り返し検討されるべき側面であった。

再三、わたしたち学校改革者にたいして異議が申し立てられる。曰く、そのような学校改革はまさにみな素晴らしいことであり、それはきっと満ちあふれる金銭を有する国家によってならば追求されうるかもしれない。しかし貧しく、窮乏し、多数の心配と負担によって憔悴している国民のなかではそのための時間は存在しない、と。

そのような異議に、わたしたちは繰り返し答えている。まさに困窮はわたしたちの友である。学校宮殿のすべては崩壊し、「中等」教育はそれ自身、詐欺師や為替政治家のデザートとして準備されており、民衆学校は荒蕪して消耗性疾患の地獄になってしまっている。号数区分xとyをめぐる給与の闘いは学校教師たちのエネルギーを消耗させており、副校長、高等学校教員、予備学校教員および中間学校教員の永遠の権利のために闘われている。そこにおいてヴィルヘルム的な鬻の時代《ドイツの第2帝政時代のような皇帝の威光をえて威張っておれる時代》にとどめが刺されている。

そしてそれから授業が行われる。都市周辺の粗末なバラックのなかで、芝生のなかで、畑の縁で、庭園の間で、森のなかで。そのような場所で始まる。わたしたちが教師を地方の街から確かに連れてくるならば、その教師が人間でありさえすれば。そして今や、従来の秩序に従わない何かが成長している。それに新たな名づけが必要な何かである。すなわち生産学校としての生活学校。そして資本主義的に毒されておらず、縁遠い人々にとってもナンセンスも、あるいは享楽も意味しない共同の仕事、その共同の仕事は共同体を生み出す。

ますますより包括的に、同盟のなかで学問的に深める活動が始まっている。同盟の活動のこの1年目に非常に狭いグループ内での徹底的かつ情熱的な討論によって達成されていることは評価しきれない。すなわち1年目の報告書は、大きな大会はなかったものの、34回のしばしば数時間にわたった幹部会、15回の同盟員集会そして16回のオープンな集会を報じている。

とはいえ、その際に与えられたさまざまな刺激は、密かではあるが、独自の研究、追究そして構成を引き起こすに違いなかった。

最も広い意味における歴史教育の問題に火がついた。さしあたりは歴史学の側面が。すなわち、わたしはその事象にどのような立場をとるのか。例えば、時代にたいする個人の関係は、経済的諸要因の関係はどのようなものか。ある時代のイデオロギーはどのよう

なものとして把握されるべきであり、教育問題は社会的関連のなかでどのようなものとして把握されるべきか。そしてわたし自身は、いったいどのようにして子どもたちを新しい精神において、すなわち自主性と創造的批判の精神において教育するのか、について解明を進めている。

ヘーニッシュ大臣率いるプロイセン文部省は1920年の夏、4人の男性に歴史教育の改革のための相当規模の研究にたいする許可を与えていた。徹底的学校改革者同盟の幹部であったアンナ・ジームゼン(Anna Siemsen)の鼓舞によって長期に渡って継続している検討が実際の行為へと濃縮された。

その委託から「概観の歴史表」が誕生した<sup>23)</sup>。その活動との関連のなかで、ジークフリート・カヴェラウは冊子『歴史教育の社会学的拡充』<sup>24)</sup>そしてすでに言及されている『社会学的教育学』(もともとは『社会と教育』というタイトルのはずだった)を書いた。『社会学的教育学』のなかでは生産学校が、向上する社会、生成する社会におけるいろいろな勢力によって発展させられていることが論じられている。それはさまざまな後継者を生み出した思想であった。

古い社会の原理としての英雄崇拜の問題に取り組んでいる冊子『歴史教育の社会学的拡充』は、すでに『新教育』誌の10月号(1920年10月16日)で予告されている。シュルテ=フェルティンク(Schulte=Vaerting)、経済地理学者のヴァルター・シュミット(Walter Schmidt)およびアルトゥー・ローゼンベルク(Althur Rosenberg)の各論説を掲載したその号は歴史的思考と教育の問題に全面的に取り組んだ。そのような試みは以来、繰り返し新しい問題設定のなかで『新教育』誌の頁を埋めている。例えば「展望」欄とともにルードヴィヒ・グリム(Ludwig Grimm)とエーリッヒ・シュテルン(Erich Stern)の論説を掲載した1921年4月号が指摘されるし、同じく1921年9月号、1922年の2月号と8月号の「展望」欄も指摘されよう。

1921年10月にカヴェラウがフランクフルト(マイン河畔)<sup>25)</sup>および『ランクヴィッツの生産学校』で発表した指導原則は歴史教育学的=方法学的な内容のものであり、それらはマックス・エプシュタイン(Max Epstein)著『教育についての本』についての諸論説<sup>26)</sup>およびパウル・エストライヒ編著『人間教育』<sup>27)</sup>についての諸論説によって補充される。その2つの著書はいずれも1922年に刊行されている。フリッツ・ヴュシンク(Fritz Wuessing)は1922年の6月号で他とは異なる社会心理学的な立場を「歴史における両極性の本質と価値について」というタイトルで根拠づけている。

かれはその歴史哲学的研究によって同時にかれの大作『18世紀初頭から現代までのドイツ国民の歴史』<sup>28)</sup>を解説している。

そのようなさまざまな同盟員による包括的な研究活

動の成果は、次の2つの双書のなかにみられる。すなわち、すでに言及されているフランツ・ヒルカーによって編纂された『生活学校』およびパウル・エストライヒによって指導された『徹底的学校改革の実践』である。両双書とも1920年に始められ、その後1921年によりやくフルに進展するようになった。

かくして生産思想は、社会学研究によって担われているのだが、1920年後半に同盟内で台頭し、とてつもない創造的活動の時代を切り開いた。

## 原注

- 1) Vgl. den amtlichen Bericht über die Reichsschulkonferenz, S. 98ff.
- 2) Ebd., S. 511.
- 3) P. Oestreich (Hrsg.): Schöpferische Erziehung. Verlag Gesellschaft und Erziehung, Berlin-Fichtenau 1920.
- 4) Protokoll der Reichsschulkonferenz, S. 783ff.
- 5) Vgl.: "Das Blaue Heft", Verlag Oesterhelb & Co., Berlin W 15 vom 17. Dez. 1921: "Reichsschulkonferenz, eine Rückschau" von Paul Oestreich, S. 335/336, auch die "Neue Erziehung", Juliheft 1922: "Lichterfelde", von Paul Oestreich.
- 6) Vgl.: Mitteilungen des Reichsbundes entschiedener Schulreformer vom Juni 1920.
- 7) Ebd., S. 534
- 8) Ebd., S. 707
- 9) Ebd., S. 1033
- 10) Neue Erziehung 1920, S. 256
- 11) Vgl.: die Schrift: Die freie studentische Produktionsgemeinschaft als Vorstufe der Einheitsschule, mit Beiträgen von Paul Oestreich, Jise Müller=Oestreich und Franz Müller.
- 12) 16. August 1920
- 13) Verlag G. Braun, Karlsruhe in Baden
- 14) Januar, März, Juni 1918 in der Freideutschen Jugend.
- 15) S. Kawerau: Soziologische Pädagogik. Verlag Quelle und Meyer 1921
- 16) Ebenda, S. 180
- 17) Entschiedene Schulreform, S. 115-126.
- 18) Schöpferische Erziehung, S. 78-85.
- 19) Neue Erziehung, 1920, S. 339.
- 20) Vgl. S. Kawerau: Soziologische Pädagogik. A.a.O., S. 234ff.
- 21) Nr. 1: Februar 1921.
- 22) Zur Produktionsschule, Verlag für Sozialwissenschaft, Berlin GW 68, Jetzt in dritter Auflage.
- 23) Die Synoptischen Geschichtstabellen. Verlag Franz Schneider, Berlin; erste Auflage Oktober 1921, zweite Auflage Oktober 1922
- 24) Soziologischer Ausbau des Geschichtsunterrichts, Verlag Neues Vaterland 1921
- 25) In der 2. Aufl. und folgenden der Produktionsschule.
- 26) "Gemeinschaftsstunde", S. 90ff.
- 27) "Gemeinschaftsstunde", S. 117ff.
- 28) Fritz Wuessing: Über Wesen und Sinn der Polarität in der Geschichte. Verlag Franz Schneider, Berlin 1921

(2014年8月12日受理)